

氏名	許 琦
ヨミガナ	キョ キ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第661号
学位授与年月日	令和3年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 〈苔類における「氣」の探求〉－乾漆技法を用いた造型と装飾表現－ 〈作品〉 MOSS Carpet 森林浴、小さなコロニー、苔の小さな庭、雨音、ヒカリ苔、緑の血管、 森の忘れもの、未知のタネ 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	小椋 範彦
（論文第1副査）	東京藝術大学	特任教授	（グローバルサ ポートセンタ ー）	井谷 善恵
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術研究科）	青木 宏憧
（副査）	東京藝術大学	教授	（大学美術館）	黒川 廣子
（副査）				（）

（論文内容の要旨）

筆者は昔から大自然に魅了され、森に入ったとき、いつも何ものかに包まれるような感覚があった。筆者はこの感覚が一体何について調べる中で、これが中国の伝統自然観にある「氣」の概念に相当するものであることを知った。さて、「氣」とは何であるのか?漆を使ってどのように「氣」を表現できるのか?以上は本論において筆者が探求したテーマである。本論文では、以下の構成によって筆者がこれまで行ってきた「氣」についての探求の軌跡を述べる。

まず、第一章では、中国伝統美術の中で「氣」をどのように表現されたのか、中国歴史の中で「氣」についてどのように定義されたのかについて説明する。中国伝統的な絵画と庭園の例を挙げて、「氣」についての表現の手法をまとめる。そして、「氣」を感じる、表現することが一体なんなのかについて考察を行なった。さらに、筆者過去の作品の中での「氣」の表現について述べた。次に、第二章では、「氣」を表現するため、筆者はなぜ苔を選んだのかについて述べる。筆者は苔の生物学的な定義と苔の歴史、苔と大自然、人間の接点から分析して、理由をまとめる。最後に、第三章では、他の作品における「氣」の漆芸表現について論じる。第四章では、提出作品を中心として、それぞれの作品の中では「氣」をどのように表現されたのかについて述べる。

本論文は以上の論考を経て、漆を生かして、苔類における「氣」の表現手法を論じた。筆者は、今後の漆芸制作の中で、造形と装飾表現の研究に基づいて、大自然から感じた「氣」をさらに可視化できるように、自分の制作理念をより成熟させられるように励みたい。

(論文審査結果の要旨)

・合否

コロナ流行による非常事態宣言下で、学内で一同に会しての審査は難しいと判断し、2021年1月18日オンラインZoom会議により、最終的に主査副査四名全員で公平に審議した結果、当該論文は博士論文として本学の基準に達していると判断し、本年度は本学博士号を授与する要件を満たしているという結論に全員一致で達した。作品については昨年すでに基準に達していると判定を得ているので、今回は論文について以下に述べる。

・論文の構成と内容について

当該論文を以下の点で評価した：

□ 論文の題目が適切か：題目〈苔類における「氣」の探求〉—乾漆技法を用いた造型と装飾表現—は、一見わかりにくい題目であるが作品と照らし合わせて矛盾はないと判断した（昨年と同じ）。

□ 論文の背景が記述され、その目的が明確か：自身の体験をもとに作品を制作しており、記述の背景も作品と合わせて審査すると矛盾はない（昨年と同じ）。

また、論文中、中国語で使われる「氣」と日本語の「氣」が使い分けられているが、それについては、第一章第二節で、「氣」ではなくて「氣」を用いる理由として、中国語の「氣」が生命の源を意味し、かつ中国では「氣」がネガティブな意味で用いられることもあるとして、自作品を説明する場合には「氣」を用いることとし、それに関連する中国の伝統的絵画なども紹介し、「氣」を用いた意味を明らかにしている。

□ 論文が制作目的に沿っているか：制作過程の記述に関して、何度も主査副査（特に作品副査）が指摘した結果、かなり修正がなされた。昨年度は漆が「硬化する」とすべき表現が、七カ所も「乾く」となっており、漆芸研究論文としては、初歩の表現上の過失であり、その他多くの表現も同様なものがみられたが、改善され、また制作過程の説明もわかりやすくなった。

□ 目的に対応して結論が適切に導かれているか：結論については今年度もかなり引き続き指導した結果、序論で問いかけられた「造形と装飾表現の研究に基づいて、大自然から感じた『氣』の可視化が可能か」は結論で述べられており、また作品との相関性もあると判断する。

□ 引用文献が適切に用いられているか：最終の審査でも、まだ何か所か脚注の不備があり（例 P6「赤塚忠」の説明がない、引用文献でページ数の記載がないなど）、それらを個々に主査副査とも指摘し、それについて最終提出までに更に改善されるものと判断する。またそれらは全体の一部であり、それらに万が一不備があっても全体に影響するのには微細だと判断した。

□ 適切な章立てにより過不足なく構成されているか：前回の審査に際し最も問題となった点である。今年度提出の当該論文でも「氣」と苔と作品の関係においても、苔などの説明と「氣」に関する情景表現が多く見られ、それに重きを置きすぎている部分はあるものの、本論文を構成する際の大事な根幹の部分であり、それを語りたいという本人の意思をくみとり、日本語としての不備な部分を指摘し指導した結果改善された。前半の論文の部分は美術史の論文としては日本語もかなり完成度が高くなってきたが、作品制作過程に関する部分の表現の稚拙さが昨年同様稚拙な部分がみられるものの、作品副査を中心に指導を続けた結果なんとか基準に達していると判断した。

・これまでの指導と今回の評価について

昨年の結果については論文主査としての指導力不足を感じ、本年度も引き続き、他の主査副査とともに、コロナ過にあってもオンラインで指導を続けた結果、かなりの改善を見ることができ、論文主査と作品副査による技術面での指導も行われた。その結果、継続してのさらなる修正・改善により、本年度は本学博士号を授与する要件を満たしているという結論に達したものである。

(作品審査結果の要旨)

苔類における「氣」の探求-乾漆技法を用いた造形と装飾表現-と題し、8点の作品で苔をモチーフに様々な「氣」を具現化する事を試み、制作を行なった。

作者は中国出身の留学生である。日本に来て、言葉も分からず孤独感を感じ、散歩していた時に苔が目に入ってきたと言う。留学生活の中で、惹かれた「苔」というモチーフが、なぜ魅力的で「氣」を感じさせるのかを分析し、制作のコンセプトを示した。京都の西方寺や長野県北八ヶ岳の原生林でリサーチを重ね創作研究が始まった。

漆塗膜の艶は有機的で瑞々しく生命を感じさせ、苔を表現するのに相応しいと感じ素材として選んでいる。また全ての作品は乾漆技法で表現されている。それは苔が永い年月をかけて地表を這い、覆い尽くす薄い膜に見え、漆芸の乾漆技法と重なるものがあるという。

作品1～6が壁面作品、7、8が立体作品である。

作品1《森林浴》森の朝のイメージ、夜露に濡れた苔が瑞々しく輝いた様子を緑の色漆を艶上げた面に沈金を施し表現されている。微妙に起伏のある面を画面とした事が効果的であった。それは風で揺らめく水面を感じさせる。作者の考える潤った朝の森を見事に表現している。

作品2《小さなコロニー》時間をかけて積層されていく苔を乾漆で作し、生態系の縮図を表現している作品。凹凸のある面に、変わり塗りと乾漆粉で枯れた苔を表現し、その上に粒状の新しい苔の芽が着いている。苔の表情を求め過ぎ作者の考えが伝わり難い作品であった。

作品3《苔の小さな庭》雨上がりに光を受けて生き生きとしている苔の生命力を表現した作品。丸く切り抜いた白蝶貝で露を、額の装飾に線状の薄貝螺鈿で雨を表現している。貝輝きを水に見立て、潤いを表現している点は効果的であった。

作品4《雨音》しとしとと静かに降る雨は森に潤いをもたらす。命の循環を表現した作品。線状の薄貝螺鈿で雨を表現し点は効果的であった。

作品5《ヒカリ苔》ヒカリゴケの輝きが夜空に輝く星と重なり、不思議で神秘的なイメージで制作した作品。黒漆の艶上げた面を夜空に見立て、ヒカリゴケを沈金で施し表現され絵は作者のイメージした世界を感じる作品に仕上がっている。

作品6《緑の血管》苔が次々と増え広がっている様子を描き生命の力を表現した作品。艶上げた漆面を冷たい岩肌に見立てた事が成功している。

作品7《未知のタネ》漂流したヤシの実の形に付着した苔を作ることで時間の経過を表現した作品。立体作品であるのと形が強いため、時間を感じ難い。

作品8《森の忘れ物》人間の時間の経過を表現した作品。朽ちて壊れていく人工物に苔が生え、時間を表現している。建物や地面に苔が生えるのが一般的なイメージだが、何故箱の形を使ったのか疑問に思う。

全て苔をモチーフに「氣」を具現化する事を試み制作している訳だが「氣」は目に見えない無形のもので表現する事が大変難しい。「氣」は何であろうか、作者は「生命の力」と「氣」を位置づけ、地球上で永く、静かに生きて来た苔の意味を借り表現していると感じた。

今回の提出作品は、独自性を感じられたものであり最終的な仕上げも問題ないが作品の大きさが小さく見えるのが悔やまれる。しかしながら博士學位には値すると考え審査員全一致の上で合意が得られた。

(総合審査結果の要旨)

作者は樹々、川、山などの自然に囲まれた環境に育ち、日常の一部で自然が溶け込んでいる。当然の日常をあらためて考えると、自らが自然と一体化になれた感覚が生まれた大自然の地域である。

制作において、焦点を「氣」の探求に絞ったことで川の流れ、鳥のさえずりなど大自然の中で、過ごしてきた経験、感覚が自然に身につけてきたことを感じた。

中国思想の「氣」の概念である。氣の存在は何となく理解できているが見えないものなので論文としては理解しがたい世界である。大自然を作っている世界に苔の存在がある。

苔生した自然豊かな奥地で苔に囲まれた世界で自身を優しく包まれている感覚を覚え、生命力を感じた。その感覚が「氣」の世界と繋がり制作へと至った。「氣」の世界を感じる人、わかる人、見える人、感覚の世界を論文で納得させるのは難しいが、少しでもその感覚を理解していただければ、作者として本望であろう。

作品においては自身の感じる「氣」と苔の存在が合致し、漆芸装飾表現を見えない氣の世界と苔の生命力を併せて苔の生命力、瑞々しさを表現することに集中している

様々な時間、気候の経過による苔の表情を表現している。

作品1《森林浴》は、朝日を浴びた苔の瑞々しさ、透明感が上手く表現できている。それぞれの作品群の中で苔の表現は秀逸である。しかし、すべての作品に関連しているが枠のある作品、長方形に形態をまめてしまっていることが、大自然の中の苔が小さく感じてしまうのがとても残念である。

時間的な問題もあると思うが広がりを持たせて苔を表現すれば作者の感じた苔に囲まれた世界で自身を優しく包まれている感覚を覚え、生命力を感じることができたであろう。

作品5《ヒカリ苔》ヒカリゴケの様子を夜空の星に重ねて表現している神秘的なイメージで制作した作品である。

作品6《緑の血管》全体の作品の印象は苔の瑞々しさをリアルに表現していてとても評価は高く印象に残る。上記以外の作品の枠で囲んだものについては、大自然の中の苔の表現がわかりにくい。

枠を付けた作品は、小さく感じてしまう。作品の表面処理、最終仕上げの素材感が直接感じられてしまう。素材がこなれていない。いわゆる生っぽく見えてしまうのが残念である。

いろいろ問題はあるが、作品1《森林浴》の表現ができたことでいろいろな問題は払拭できる。この提出作品、論文は難解なテーマであったが漆芸をとおして氣の表現、苔の表現は、独自性があり、なんとかまとまったであろう。博士学位には審査員全一致の上で合意が得られた。